

少しずつ少しずつ、次の準備のために、カラカス日本人学校は動き出しています！

昨日、日本文化週間の案内プリントを配布しました。準備は着々と進んでいます！



玄関の沿革史が 2016 年度まで完成しました。創立してから 41 年分です。この沿革史を見れば、ひと目で学校の歴史が分かります。

↑校庭の樹木の札の足りない分をオマールさんに付けてもらいました。観察池は、「ふれあいの泉～La fuente de la armonia～」としました。→昨日、全員に「アビラ登山記録証」を授与しました。全員、アビラ登山に向けて、グラウンドを 200 周(20km)以上走り、当日も最高の頑張りを見せてくれました。



## カラカス日本人学校をもっともっと知り、もっともっと好きになるために…(その150)

### カラカス日本人学校はみんなの大切な、大切な宝物です！ NO. 45

今回も、西岡裕知先生の「カラカス太鼓」創設の頃の話、その3回目です。2月18日(土)の日本文化週間で演奏するカラカス太鼓の曲がどのようにして出来たのかと思うと、もっともっと真剣に叩かねばと思います。

#### ■カラカス太鼓ができるまで(海をこえて～Las Olas～)が完成するまで

“アビラのひびき”と同時進行で、カラカス太鼓の歌の歌詞を子どもたちに募集した。応募総数20数点の中から、当時小学部5年生の福井麻生さんの作品に決定した。太鼓と篠笛、そして仲間や友情をテーマにしたすばらしい歌詞が生まれた。“友情のフィエスタ”というひびきも、南米的で楽しめる。この名前を考えたのも麻生さんである。歌詞を岐阜県在住の作曲家、近藤育子氏に送って曲をつけてもらい、平成6年2月“友情のフィエスタ”が完成した。“アビラのひびき”の楽譜が完成し指導を始めること、すぐにもう一つの太鼓の曲の作曲にとりかかった。時はすでに3学期。平成4年度派遣の鈴木教諭は帰国を間近に控えている。今までいっしょにやってきて2曲目の完成を見ずに帰る無念さは想像に難くない。いっしょにカラカス太鼓をつくってきた彼の気持ちを何とかして曲に残したいと考えた。以下は鈴木教諭と私の会話。「鈴木さんの郷里の北海道の歌って、どんなのがあるの?」「そりゃあ、“ソーラン節”と“知床旅情”ぐらいかな?」「それぐらいは、おれも知ってるけど……?」

人を喰ったようなこの会話がヒントになり、2曲目が生まれていく。2曲目のテーマは、日本とヴェネズエラ・南米の融合と、ともにカラカス太鼓をつくってきた仲間の気持ちを曲の中に残すことであった。横笛のメロディのモチーフは彼の郷里の歌“ソーラン節”からとって作曲した。また、日本風の太鼓のリズムは、ニシンの大漁に沸く船のイメージをもとにしている。ラテンの部分にはヴェネズエラの典型的な音楽のメレンゲと、ブラジルのサンバを使っている。このリズムについては、ラテン音楽に造詣の深い保護者の窪政明氏の助言をいただいたことを記しておく。波のイメージから始まり、波のイメージで終わるという構想は固まっていたが、エンディングが今一歩しっくりいかなかったとき、一美教諭から最後の波の部分はトレモロを重ねて始めてはどうかという案が出された。“アビラのひびき”と同じように、ワイワイガヤガヤと詰めていっていることである。さっそくやってみる。これが見事に決まった。何日間もの悩みを一掃してくれた神の声であった。2曲目の完成である。こうしてできた第二章は、海を越えて日本とヴェネズエラがつながっていくイメージにふさわしいものとなった。曲名は職員から出された案の中から2つをくっつけ、一方の“波”はスペイン語で表すことにより両国のつながりをイメージした。こうして、平成7年(1995年)6月に“海をこえて～Las Olas～”が完成した。和太鼓をカラカス日本人学校に取り入れようと決めてから、ちょうど1年。太鼓と横笛の曲が2曲と歌が1曲、子どもたちのレパートリーになっていった。

日本から購入する楽器は必要最小限のものを購入したので、残りは手作りの必要があった。鉦は溶接ができる近くの工場に依頼して作ってもらった。竹は細いもので我慢しなくてはいけなかと心配しているときに偶然太いものが見つかった。こちらでこんな太い竹があるなんて驚いたものだ。裏側を切って響きをつけたら、十分な楽器である。また銭太鼓に使う竹は、コンセルへの Sr.Jose がいつもいっしょに山の方へ行って切ってくれた。ばちも日本から送ってもらったのが痛んできたので、こちらの木工所に依頼して、堅い木で作ってもらった。“海をこえて～Las Olas～”のように、楽器も日本とヴェネズエラの融合である。



今は鳴り響いている横笛だが、ほとんどの子どもたちは初めて手にした楽器である。原理的にはフルートと全く同じ。唇をつくらないと音は出ない。音が出た後も、響く音になるには時間がかかる。当然、初めは全く音が出なかった。担当の宮永教諭、安教諭の初めのころの心配はいかほどであったろうか。人数の都合上、3・4年生が中心メンバーになる。発達段階としてはまだまだ難しいところである。それがたった1年間でここまで吹けるようになるのだからすばらしい。心配の大きさと比例して喜びも大きいものである。(写真:創立20周年記念式典の様子 提供 西岡先生) つづく